

Yamaha Router Case Study

ヤマハ ルーター

導入事例

新潟日報社

ヤマハルーターを活用し、データ・音声の統合WANを再構築 効率的な通信網を「QoS連携機能」で実現

地域に密着した報道で多くの県民から支持される新潟日報社。ここでは、新聞制作の新システム導入に伴い、ネットワークを着々と強化しつつある。広帯域・低コストのフレッツ網を活用するとともに、ヤマハルーター「RTXシリーズ」を本社及び県内29拠点に導入している。具体的には、ベストエフォート回線でも安定的な通信が行えるヤマハ独自の「QoS連携機能」を活用。高効率かつ災害時にも対応可能なデータ・内線電話（VoIP）の統合ネットワークを構築している。



新潟日報社
システム室 システム部
部長

佐藤 寛 氏



新潟日報社
システム室 システム部
主任

高野 郁雄 氏



新潟日報社
システム室
システム部

川上 智靖 氏

新システムを契機に広帯域の データ・音声統合WANを構築

新潟日報社は、50万部の発行部数を誇る新聞社。確かな報道で「新潟の今」を伝え、県内普及率61%を超えるなど多くの県民から支持されている。その紙面づくりの原動力となっているのが、地域に密着した取材網と最新の情報技術だ。新潟市内の本社と県内各地の支社・支局・記者クラブをネットワークで結び、読者にタイムリーなニュースを届けている。

さらに同社では、これまで以上にスピーディで信頼性の高い紙面づくりを目指し、各種システムの刷新を図っている。記事や写真など原稿の集配信を行う「素材管理システム」もその1つ。これは、支社・支局の記者から送信される取材メモを基に、記者と本社の編集デスクが掲載する記事を検討したり、従来FAXを使っていた印刷前の記事内容の確認を、PDFファイルへと電子化し、PC上で行えるようにするシステムだ。

「この素材管理システムの実現には、各

拠点の記者が本社と双方向で安全にデータをやり取りできる広帯域ネットワークの構築が欠かせません。また、災害時のシステム運用や内線通話の確保など、WANの機能強化も求められていました」と新潟日報社システム部長 佐藤 寛氏は述べる。

従来同社では、支社・中規模支局にATM専用サービス、小規模支局にISDN、記者クラブにフレッツ・オフィスを導入しWANを構築していたが、狭帯域の拠点では、大容量のPDFデータの利用や双方向通信に支障をきたす懸念があった。また、中越大地震の際、停電でデータ通信が困難になった経験などを踏まえ「各拠点で新システムを快適に利用できるようデータ通信網の高速・広帯域化や、音声通信を含めた通信コストの削減、新聞の発行に欠かせない通信ラインの確保などを目標に、新たなWAN構築に着手したのです」と、新潟日報社システム部主任の高野 郁雄氏は話す。

RTXシリーズの「QoS連携機能」で 音声品質の高い内線電話網を実現

新潟日報社のWAN構築をサポートしてきたNTT東日本新潟支店では、こうした目標を達成するため、広帯域・低コストのフレッツの活用を提案した。具体的には、インターネットから隔離された高セキュリティの「フレッツ・アクセスサポート」を用い、本社と各拠点をフレッツ回線で接続

PROFILE

新潟日報社

本社：新潟県新潟市善久772-2

設立：1942年11月

資本金：1億4,250万円

従業員数：603人（2006年12月）

事業概要：発行部数50万部を超える「新潟日報」を中核に、県内外に張り巡らされた取材力を基に、放送、電光板、ホームページ、携帯電話などのさまざまなメディアを通じ、蓄積された膨大な情報資産を有効利用しながら「新潟の今」を伝えている。

<http://www.niigata-nippo.co.jp/>

新潟日報



NTT東日本-新潟
法人営業部 SE部門
第一SE担当

長谷川 茂 氏

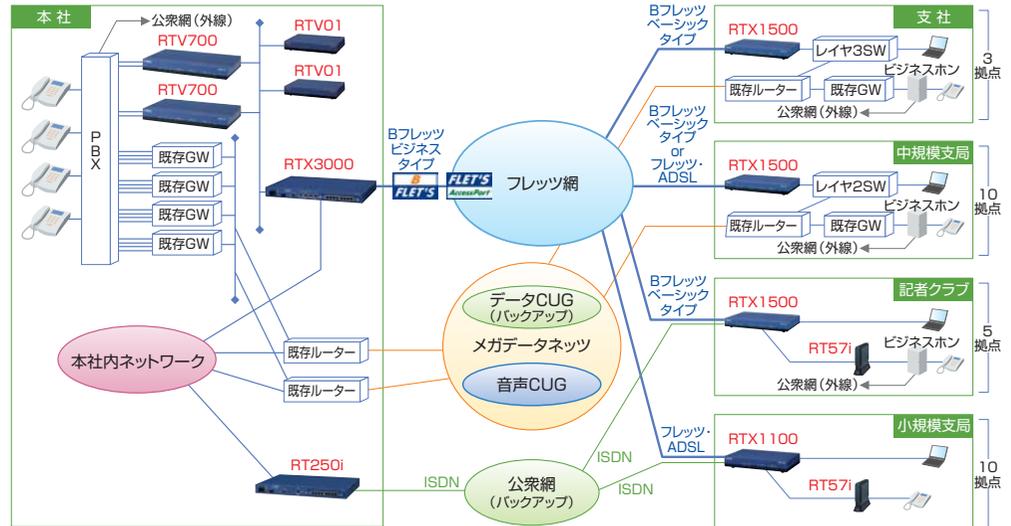


NTT東日本-新潟
法人営業部 SE部門
第一SE担当

佐野 博 氏

図 新潟日報社のWAN構成概要

WANネットワーク構成



本社にイーサアクセスVPNルーター-RTX3000、支社・支局・記者クラブにRTX1500、RTX1100を導入。フレッツ・アクセスポートを介した高セキュリティのVPNを構築するとともに、フレッツ・ADSLを導入する拠点に対してQoS制御を適用することで通信品質の高い内線電話を可能にしている。

するとともに、既存のデータ回線をバックアップに利用する構成だ(図)。特にWANの要となるVPNルーターにはヤマハの「RTXシリーズ」を採用している(回線のバックアップとして既存メガデータネットワークやISDN網を使用し、メイン回線障害時に自動でバックアップ回線へ切替)。その理由をNTT東日本-新潟SE担当の長谷川茂氏は次のように話す。

「高速なデータ通信と内線電話を統合するWANには、信頼性の高いルーターが重要なポイントとなります。その点、RTXシリーズは、大規模向けから小規模向けまで製品ラインアップが充実しており、ヤマハ1社であらゆるニーズに対応できます。また、『QoS連携機能』を活用することで、内線電話の通信品質を高められると判断しました」

QoS連携機能とは、ベストエフォート回線を利用したネットワークでより確実な通信を可能にするヤマハ独自の機能で「RTX3000」「RTX1500」「RTX1100」を組み合わせる。帯域検出機能を用い、センター側のRTX3000と拠点側のRTX1500、RTX1100の実行帯域を定期的に測定し、QoS連携機能を適用することでパケット送信速度を帯域の変動に合わせて、パケットロスを抑える仕組みだ。

新潟日報社では、本社をはじめ、各拠点ではBフレッツの導入を原則としているが、



本社のシステム室に設置されたヤマハのルーター群。データと音声の安定した通信に貢献している。

提供エリアの関係からフレッツ・ADSLを導入する拠点もある。フレッツ・ADSLの上り(最大5Mbps)にQoS連携機能を利用すれば、安定したデータ通信と音声通信が実現する。

「WAN構築に先立ち、新潟支店内でQoS連携機能の検証を行っています。ベストエフォート回線でもQoS制御を行うことで音声品質を改善できる検証結果が得られています」とNTT東日本-新潟SE担当の佐野博氏は述べる。また、検証段階からWAN構築に参画している新潟日報社システム部の川上智靖氏も「一般電話網の使用感に近く、違和感なくVoIPの内線通話が行えます」と評価する。

データ通信と内線電話の統合で 災害時にも迅速な報道体制を整備

2006年10月から、RTXシリーズとフレッツ・アクセスポートを組み合わせた広帯域のWANが稼働している。その導入効果の検証・評価は、素材管理システムが本格稼働を開始する2007年1月以降となるが、スムーズな紙面づくりや通信コストの削減のみならず、災害時にも新聞発行を継続できる体制が整ったといえるだろう。

「中越大地震のような災害時における号外の発行など、迅速かつ正確なニュースを届けることが新聞の使命。その意味

で今回のネットワーク再構築の意義は大きいと思います。今回、データ通信と内線電話を統合し、回線のバックアップを実施しているのも、平常時の高速通信のみならず、災害時の報道に備えるためでもあるのです」と佐藤氏は語る。

また、現在、情報保護の観点から記者のPCは、社内システム接続用とインターネット接続用で使い分けているが「セキュリティを保ちながら利便性を高めるためのネットワークの提案を今後もお願いしたいですね」と新潟日報社のシステム部の各氏はヤマハとNTT東日本に期待する。

ブロードバンド回線を活用しつつ、安定的なデータ通信と内線電話をいかに実現していくか——。統合WANを構築した新潟日報社の事例は、多くの企業にとっても注目に値する事例だといえるだろう。

お問い合わせ



ヤマハ株式会社

ヤマハルーターお客様ご相談センター
RTX3000・RTX1500・RTX1100のお問い合わせ先
TEL 053-478-2806 FAX 053-460-3489

ネットポランチョールセンター
RTV700・RT57iのお問い合わせ先
TEL 03-5715-0350

<http://www.yamaha.co.jp/router/>